

## “Je Ne Parle Pas Français” 考

—Raoul Duquette の墮落と救い—

田 辺 洋 子

K. Mansfield は “Je Ne Parle Pas Français” 執筆中の1918年2月3日、夫 J. M. Murry 宛の手紙の中で、この作品のことを『墮落からの叫び声』(“a cry against corruption”) から生まれたものだ<sup>(1)</sup>と伝えている。又、その一週間後の手紙の中で、それは『愛への賛辞』(“a tribute to Love”) であるとも言っている<sup>(2)</sup>。表現は異なるが両者の意味するところは同じであろう。墮落とは話者 Raoul Duquette に見られる広い意味での、絶望や破滅の宿命観を含むそれであり、その墮落の対極に位置するものとして愛が捉えられようとしている。愛については、Mouse の Dick への愛がその賛辞の対象であるという見方もある<sup>(3)</sup>が、二人の間の愛情を作者が理想と考えていたかどうかには疑問が残る。むしろその逆のようですらある。恐らく作中にそれ自体が賛辞を受けるに値するような愛の形を見出すことはできない。『愛への賛辞』とは、否定的な愛の形を徹底的に描き切ることによって、作者が逆説的に到達しようとしたテーマだったのではないだろうか。他者を十全に愛することができない、則ち愛されることもない人間の墮落から逃がれようとする声が聞こえて来るとすれば、それが自ずから『愛への賛辞』となるだろう。

この作品は、自称作家のフランス人 Raoul Duquette が行き付けのカフェで綴るメモの形を取って展開する。彼はいきなり、人間とは中身を空にされたり詰め込まれたり、放り出されたり投げ降ろされたりする旅行鞆の

ようなもので、紛失しては見つけ出されるそのうちに、最後のポーターに最後の列車に乗せられてしまうのが定めだが、自分はその鞆を検閲する税関吏だと豪語する。その鞆を覚めた目で見ている彼はまた一方で、中身について一杯食わされるか否かの緊張感を楽しんでもいる。その点では残念ながらこのカフェには魅力的な旅行鞆は見当らない。常連は労働者か売春婦を連れた兵士達。マダムも接客の手が空くと誰を待つともなく外を往来する人々に視線を走らせるだけだ。昔は誰かを探していたのかも知れないが、その『物憂い諦め顔』（“air of fatigue and hopelessness”）（p. 278）からして、もう随分前にそんな希望は捨ててしまったらしい。相手もないまま待つことが今では彼女の生活の一部となっている。ウェーターも暇な時には椅子の背に手を掛けて、まるで『殺人現場のカフェ』の写真を撮ってもらおうと待ち構えているかのようなポーズをきめている。カフェという舞台の上で待ち惚けが彼らの役所だ。

この舞台の主人公はもちろん Duquette 自身なのだが、彼はある寒い冬の夕暮れ時に初めて立ち寄ったこの店で、まさにこの場が彼を待ち望んでいたその瞬間、観客が登場を期待しているその時に舞台上に上ったという感動を覚える。その快感が忘れられずにこのカフェを繰り返し訪ねるようになったわけだが、彼はその時主役として上った舞台が他でもない、誰かを当てもなく待ち続けることが演じられている舞台だったという皮肉に未だに気付いてはいない。今夜もひたすら自分に掛けられた呪い<sup>まじな</sup>に酔い、エビファニー的な事件の到来を待ち構えていた。すると終にその瞬間が訪れる。席の近くで探り当てたメモ帳に落書きされた『私、フランス語が話せません』（“*Je ne parle pas français.*”）という言葉に彼は圧倒的な衝撃を受ける。その衝撃の強さに、彼は自分の作家としての一級品の証拠を認め、それに酔い痴れながら、『私、フランス語が話せません』という言葉で最後に別れた Mouse という女の回想に耽り始める。

確かに Duquette は人間を旅行鞆とみなし、『人間の魂の神秘』（“the mystery of the hunran soul”）（p. 277）など信じていないと公言している。

彼にとって人生が神秘でないならば、それを様々な“rule” (p. 280) の枠にはめることも可能と言える。『僕は、決して後悔しないこと、決して過去を振り返らないことを人生のルールとしている。後悔なんて大変なエネルギーの浪費であって、作家志望の人間がそんなものに耽っている余裕などない。形にすることもその上に何かを築くこともできないなら、その中でのたうち回るのが関の山だ』と彼は言う。しかし、まるで窃視狂のように他人という鞆の中身を探ることによって彼の言う『豊かな経験』を積んでみたところで、その経験が振り返られるべきものでないとするれば、また後悔の対象になり得ないものなら、それを糧にして小説を書くことはできないだろう。鞆なら中身を詰め込めば膨れ上がるが、人間にとっての経験はそれだけで人間を大きくするものではない。だが、そんなルールを掲げながら彼は今、『私、フランス語が話せません』という言葉を目にしたとたん、『もう一人の自分』 (“my other self”) (p. 280) が迷った犬のごとく Mouse の姿を求めて往来に飛び出すのを止めることができなかった。この回想自体が、冷笑的なモダニストを気取った彼のルール違反の上に、分裂した自我の上に成立していることを忘れてはならないだろう。

『僕の名はラウル・デュケット。年は二十六で生粋のパリジャン。家族は……これはどうでもいいことで、僕には家族はいないし欲しいとも思わない。子供の頃の事など考えたこともない。そんなものは忘れてしまった。』 Duquette はこのように自分について語り始めるのだが、『文学的』見地からしてどうしても省くことのできない、ある子供時代の記憶を甦らせている。忘れてしまったはずの幼年期の思い出の中に唯一つ、現在の自分を語るに当って無視することのできない出来事があったのだ。それは彼が十才の頃、家に入り出ていたアフリカ生れの洗濯婦に強引にセックスの相手をさせられたという事実だ。どうかなってしまうほど耳の中にキスをされ、心の子供時代は『洒落た言い方をすれば「キスに消し去られて』 (“to put it prettily, ‘kissed away’”) (p. 281) しまったのだ。この事があ

って以来、彼は懶く懐柔的で、しかも貧欲な人間になって行く。何もかも見え透いて、誰でも思いのままにできると信じ込む。これが彼の人生を狂わせ、一生の仕事までも決定してしまうのだが、彼はそれを『文学的』にのみ捉えようとする。

客観的には非常に忌わしいが、彼にとっては『文学的』に重要なその思い出を除けば、Duquette の人生は独身アパートの住人になった時から始まる。人生が一つの創作劇でもあるかのように、彼は自分の人生のスタートを自分で定め、それ以前の一切のものから遮断しようとする。子供時代が「キスに消し去られ」、そこへいきなり青年時代が接木された人生は、Duquette の内部分裂を端的に物語ると同時に、彼における文学の意味をも解き明かしてくれるはずだ。例えば、あのエピファニー的瞬間に彼はどのようなセンセーションに襲われただろうか。『頭と腕を除いて、テーブルの下にある僕の体は全て溶けて流れ去ってしまった』と彼は言っている。頭と腕とは、あの一件以来、異常に鋭敏になった彼の頭脳と、そこから生まれる思想を巧みに文字にしようとする仕業を意味する。それと完全に切り離されて水と化す下半身は「キスに消し去られて」しまった子供時代と考えられよう。彼の上半身が純文学を志す小説家ならば下半身は何者なのか。

『英文学に興味を持つ真面目な新進作家』の Duquette には批評家連中をあつと言わせるような、これまで誰も物したことのない『隠れた世界』(“the submerged world”) (p. 282) を描いてみせるという野望がある。やさしいユーモアを込めて内面からごく自然に描いてみせると。そして、この“submerged”という語の意味の多重性が Duquette の正体を教えてくれるだろう。彼は最初にこの言葉を使う時、その直前で『これまで触れられたことのない事柄を書きたい』と言っている。この場合の“submerged”とは、彼が内面から、と言っているように意識下の世界を表している。ところが次に彼がこの語を使う時、彼は“my submerged life” (p. 283) という表現に変えた上で“my bad life”と並べている。彼の乱れた、

言わばテーブルの下の生活を示す言葉として。最初の“submerged”の意味は確かに『文学的』であったが、次にそれは私的に変化し、終に三度目に出て来る時、彼は、実は『とても嫌悪を催させ、決して文学の日の目を見ることのない私の陰の生活』と告白する。決して『文学的』ではあり得ない彼の表面下の『陰の生活』が実は売春の客引きだということを、この時までには読者は諒解済みだろう。そしてこれが Duquette における文字通りの墮落の意味するところなのだ。

では、Duquette の墮落が、救いを絶望的にするほど深いものであったかどうか、彼の Dick と Mouse 各々に対する関わり方から探っていくことにしよう。

自分の文学的才能を一級品だと信じ込み、鏡に映る自らの美しい姿に見蕩れながら、女性の心も思いのままに日々を過ごしていた Duquette の前に、ある時 Dick Harmon というイギリス人作家が現われる。英文学に傾倒する作家 Duquette にとって仏文学に興味を持つイギリス人作家というだけで魅力は十分であった。その上、彼は Dick の極めてイギリス的な所、静かに夢見るような物腰や全てを穏やかに受け止める態度に心を奪われ、忽ち彼と深い関係に陥る。いつもなら検閲する立場にいる Duquette が逆に Dick には次から次へと手の内を見せ、『僕の生活の両面』(“both sides of my life”) (p. 285) までもさらけ出すに至る。一方、Dick はこれを単に「なかなか面白いね」(That’s very curious’) (p. 285) と受け流し、しかも一向に面白がっている様子はない。そのように平然とした Dick の態度にも、本来の姿を見失いかけている自分にも歯痒い思いをしながら、Duquette は彼との関係を重ねて行くが、そんなある日、突然、彼は Dick から帰国を告げられる。その時には男に捨てられた『女が感じるように』傷ついたとは言いながら、ひと度 Dick が目の前から姿を消してしまえば、彼は『自分の定めたルール通り』(“according to my rule”) (p. 287) あれほど夢中になっていた Dick のことを忘れてしまう。Dick が歌ってくれ

ていた歌を口ずさんでみても、もはや調子を外さないでは歌えない。それは彼がその時の気分には二度と戻れないことを意味している。Dick が女友達を連れてフランスを再訪すると言ってくる、嫉妬を覚えるどころか、その女性への興味を募らせるばかりだ。逃がしたものは追わない『ルール通り』、彼は Dick も彼との関係も訳なく過去の世界に葬ってしまった。彼に Mouse と泊まる部屋を見つけておいてほしいと頼まれれば、自分の食事代が滞るホテルを思い出し、『無期限に部屋を借りようというイギリス人二人なら大した内金になる』と金銭への執着も以前に劣るところはない。結局、Dick との恋は Duquette が自分のルールを守り抜いたことを示して終わったにすぎない。

Duquette と Dick の同性愛を破局に到らしめたのは、実はさらに深刻な後者のその母とのエディプス的關係であった事は後に判明する。その上、再びフランスを訪れた Dick が Duquette には写真で見た彼の母そっくりに思われた通り、彼が母親と互いに分身的な存在になっていたことも二人の関係をより倒錯したものとしている。初めて Dick から彼の母親の写真を見せられた時、Duquette はその表情に刻まれたやつれた自尊心に対する嫌悪の余り思わず十字を切りそうになったが、確かに彼女は彼にとっても息子の Dick 自身にとっても十字を切られるべき存在であったことになる。しかし、その母と息子の関係の最大の犠牲者は、Duquette ではなく、Dick にフランスまで連れて来られながらそのまま彼に置き去りにされた Mouse と言えるだろう。Mouse を一人残したまま Dick が二度目にフランスを後にしたのは一度目の時と同様、その背後に呪縛的な母親の愛情があったからだ。ただし、Duquette と Dick の恋の破局に、Duquette のルール遵守と Dick の母との関係という両者からの要素があったように、彼女と Dick の間の破綻の要因も全て Dick に求めることはできない。Duquette のナルシシズムや Dick の分身的な母への愛に劣らぬ偏向を彼女自身の中にも見出すことができるだろう。

Mouse はその名が示す通り、小柄ではかない妖精のような女性だ。彼

女には Dick と駅に降り立った時から、グレーのマフ (“muff”) を絶えず離さず愛撫するという顕著な癖があった。Duquette は直感的にこれを Mouse II と名付けるが、マフが彼女の分身的存在であることは容易に察することができるだろう。また、“muff”とは元々女性の性器の意もあるから、彼女がこれを玩ぶ仕種からは彼女の処女性や自己愛的傾向をも推測することができる。フランスに来てわずか半日で Dick に捨てられるまでに、Mouse II は口数の少ない彼女自身の代わりに実に多くのことを物語ってくれているようだ。

駅の構内で Dick に少し遅れてやって来た Mouse は Duquette と一緒にいる彼に自分を気付かせるために『小さなマフを振って』 (“with her minute muff”) (p. 290) 合図をする。そして足早に駆け寄って彼に英語で二言三言話をするが、彼はこれにフランス語で答えている。『フランス語に堪能』で、『少々鼻につくほど達者なフランス語』を使う Dick に半ば挑戦するかのようになり、Mouse は Duquette に「私、フランス語が話せません」と自己紹介をする。もちろん彼女はフランス語が全く話せないわけではないから、それは Dick に対する、言葉に限らぬもっと広い意味でのコミュニケーションのずれを暗示するような発言である。また、Duquette にはそれが彼の代表するフランスの俗悪さとの関わりの放棄のように聞こえたかもしれない。幾分拒絶的な自己紹介の後で、今度は Dick が彼女に退屈だった長旅への同意を求めると、彼女は何も答えず『グレーのマフをなで始め、並んで歩く間中その仕種を続けている。』 (“began stroking her grey muff; she walked beside us stroking her grey muff all the way.”) (p. 290) それはあたかも彼女の心が外部との連絡を絶ち、ひたすらもう一人の自分へと向かうかのようなようだ。三人がホテルに着くと、Mouse は神妙にボーイの前に進み出たかと思うと、『少々寸詰まりな英語なまりで』「紅茶を三つお願い」と叫ぶ。それと同時に彼女の両手はマフの中で組み合わされたままボーイの前へ突き出された。まるでそのマフがこの窮地から救い出してほしいと哀願しているかのように。現状から救わ

りたい祈りの気持ちを彼女はその原因でもあるマフを指し示すことで伝達しようとしているが、それは全く無関係なボーイに向かって「お茶」という無関係な言葉となって空しく吐露されるにすぎない。さらに、そのお茶と彼女が着ているグレーのコートにまつわる彼女の Dick との会話は交わることのない二人の気持ちを明らかに示している。部屋の中でまで執拗にコートを着ている彼女に向かって彼はこれを脱ぐように勧めるのだが、彼女は「ええ、今はまだ」(‘No, thanks. Not just now.’) (p. 293) と拒絶する。マフをも含めた彼女を包むグレーのコートは彼女と Dick の意思の疎通を妨げる一枚の壁となっている。やがて紅茶が運ばれると、初めて彼女はそれに救われたかのように『マフから手を出し』(‘took her hands out of her muff’) (p. 294), 手袋もケープも脱ぎ捨てるが、この時も彼女はボーイにしか話し掛けようとはしていない。次いで、言わば祈りの託された紅茶を今度は Mouse が Dick に勧める段になると、彼はこれを断ってしまう。‘No, thanks. Not just now.’ (p. 294) という偶然にも先程 Mouse が言ったのと全く同じ言葉によって。彼女を包み込む自己愛の殻のようなコートから出て来てほしいという Dick の願いが素直に聞き入れられなかったように、Mouse のその未熟な性から救われたいという願いの込められたお茶を彼もまた拒絶した。各々に切実な願いは終に相手に聞き届けられることはなかったのだ。

紅茶を断って自分の部屋に下った Dick は Mouse 宛の置き手紙を残したまま忽然と消えてしまう。彼は母への愛を Mouse への愛に先行させ、彼女を一人フランスに置き去りにしてイギリスに帰ることを選択する。彼にはどうしても彼を自分の元へ引き戻そうとする母の呪縛から逃れることができない。自分が望んでいるか否かは別として、母にとっては自分と別れて暮すことが死を意味すると感じるほど、二人の絆を意識しないではいられないのだが、それは Mouse にとっての自分の存在をそれほどに評価できないということにもなるだろう。手紙を読んで全てを察した Mouse は『最後の武器を手離してしまったかのように両手を投げ出して』

(“flung out her hands as though the last of her poor little weapons was gone”) (p. 296) 床に倒れた。マフにくるんで突き出された哀願の手は一端マフから出されてしまえば、それを受け入れる救いの手が現われない限り、空しく投げ出されるより外にないのである。

では、Duquette の目に Dick と Mouse は直接どのように映っているのだろうか。彼が『純で鈍な奴ら』(“these sleepy innocents”) (p. 289) と密かに名付けたこの二人のイギリス人は彼に言わせればパリという異に自分から飛び込んで来た格好の餌食のようなものだった。ところが彼は Dick の時と同様、新たに Mouse の魅力の虜になってしまう。彼女の純真さが、『あまりに華奢でか弱いので見る度に初めてのよな気がする』(“so fragile and fine that each time I looked at her it was as if for the first time”) (p. 291) という彼には珍しい「(超)論理的」<sup>[4]</sup>で新鮮な驚きを与えるに十分であったからだ。彼はまたしてもいつもの平静さを保てないまま彼女と Dick に同伴する自分を見出さなくてはならない。例えば彼は三人でホテルへ向かうタクシーに揺られながら、自分達が『人生がさて一振りしようかとしている三つのサイコロのようだ』という感懐を抱く。税関吏役の彼が今は他の二つの旅行鞆と一緒に運ばれようとしているかのようだ。また彼は二人の調子に合わせているうちに、つい『背のたわらない所』まで出て行きそうになる。役者であると同時に、むしろ観客でもあった彼が客席に帰ることを忘れ、自分の席までわからなくなってしまいそうになり、そんな自分に気が付いて、どうにかその憐れな道化に拍手を送るのが精一杯だ。ようやく興奮が治まり、観客席に落ち着き始めると Duquette は二人の様子、とりわけ Dick の様子がおかしいことに気付き始める。ホテルで彼が席を立った機会に、Duquette は Mouse から彼が悩んでいる理由を聞き出そうとする。しかし、表面では彼らに対する気遣いを装いながら、彼の心の声は『こんな楽しい思いをするのは数カ月来なかったことだ』(“it was months and months since I had been so enter-

tained”) (p. 295) と囁いている。その後、Dick の様子を見に行つた Mouse から手渡された彼の置き手紙を読み、同時に打ち拉がれている彼女を目の当りにすると、彼の歓喜は『めつたにない代物』(“a rare find”) (p. 297) にお目にかかったことで絶頂に達する。これで『「なかなか面白い」のイギリス人と互角、いや復讐することさえできた』(“I was even—more than even with my ‘that’s very curious and interesting’ Englishman...”) と考えるからだ。もちろんそれは自分を捨てて苦しめた Dick が母親と Mouse の間で自分に劣らず苦しんでいたということによる互角のように単純なものではない。それはどちらがより多く『楽しんだ』(“entertained”) かという勝負における勝敗だ。自分のさらけ出した姿に ‘curious’ としか言わなかつたイギリス人に対する復讐は、自分がそれ以上に好奇心を満足させられることである。自分が見せた本性に対する Dick の興味を、今日撃した二人の苦悩の場面の面白さが凄いだという喜びだ。そして彼らの苦悩の根底には自分と同じ性の倒錯という要因が潜んでいたのだとわかれば、それ以上の喜びがあるだろうか。彼自身の墮落の不幸は同質の不幸で苦しむ他人への好奇心を満足させることでしか解消されない。人間を旅行鞆として単なる興味の対象としか思わない Duquette にとっては、そのような興味の対象を他人が持っていることのみが嫉妬に値するのだ。

言わば好奇心の勝負に勝ち誇る一方、Duquette は当然 Mouse を助けてやりたいという気持ちにも駆られている。親切の手を差し伸べてはまた引込め、そんな自分を蹴飛ばしてやりたいと思うように、彼の体までも心同様二つに分かれていたなら、それも可能だったかもしれない。しかし、彼女の心を引き戻したいと思う時、彼は『これだけは演技ではなかつた』(“I swear I was not acting then.”) (p. 298) と告白している。さらに、異境に一人残された彼女に、「お金はあるのですか」と訊ねながら、その終始気に掛かっていた疑問自体を彼は『憎んで』いる。Mouse に対しては金への執着も薄らいでしまうかのように、例のホテルの『内金』の話が反

古になってしまったことも、それを彼女との関連の中で考えることは『節度がない』とさえ感じている。そんな彼に心を許してか、Mouse は『私、フランス語が話せません』から心細いので、明日また来て下さいと彼に言う。その約束を交しながら Duquette は二度と再び彼女の前に現われることはなかった。それでこそ面目躍如だと彼は言うが、『自分が何故会いに行かなかったのか今でもよくわからない』(“Even now I don't fully understand why.”) (p. 298) と疑問を発する。人間の魂の“mystery”を信じない男が自分の心の謎を解けないでいる。友人役を徹す自信がなかったからだろうが、『好奇心』(“curiosity”) (p. 298) からだけでも十分彼女の行方を見届けようとしたのではないだろうか、と。しかし、もし彼が好奇心を発揮して再び Mouse の前に現われていたらどうなっていたであろうか。恐らく、たった今彼がこのメモを終えて席を立つ間に、「真正銘の処女がいますよ」と男に声を掛けた通りに、いずれは自分の商売の対象にしていだらう。もちろん彼女の行方も知らない今だから、このような事が言えるのだが、そのような結末を恐れて、彼は自ら再び彼女の前に姿を見せることを思い留まったのではないだろうか。彼女を好奇心の対象として捉えることを止め、『私、フランス語が話せません』という言葉、彼の墮落に染められることへの拒絶の叫びとして自ら聞こうと努め、そうすることによって自分自身もその墮落の底まで落ちてしまうことだけは免れようとしているかのようである。

Duquette の心の謎はさらに、『彼女はなんと僕にルールを破らせるのか』(“But how she makes me break my rule.”) (p. 299) という問いへと発展して行く。Dick でさえ彼に破らせることのできなかつたルールを Mouse はいとも容易に破らせてしまった。彼女に関する限り、Duquette は過去を振り返り、失ったものを探し続けなければいけない。それが冒頭で彼が見せた犬のように路頭を彷徨い、彼女の面影を探すもう一人の自分であるし、カフェの自動ピアノの調べを聞きながら彼女のいる幼少時代の風景を描き出している近頃の彼の姿である。彼は Mouse と自分を幼い

子供に見立て、自分の手で削除した幼年時代の空隙の中へ架空の幼年時代を創造しながら、本来無かったものへのノスタルジーを募らせる。

Duquette をして人間の魂の “mystery” に脱帽させたものは Mouse の純情だったと言えば簡単だが、それはその純情の中でもとりわけ、彼女が Dick との恋の破綻においてでさえも見せた飽くまで希望を失わない姿勢だったのではないだろうか。彼女は Dick とフランスへ渡って来る間にも不安と背中合わせであったことを「それは体中で感じていたけれど、でも希望を持ち続けていたのです——だって誰でもそういうものでしょう」(‘I felt it all through me, but I still went on hoping—as one so stupidly does, yow know.’) (p. 297) と Duquette に打ち明けている。『当てもなく』(“hopeless”) 人を待つカフェのマダム、殺人現場の写真のポーズを取っているウェーター、そして過去を捨て、つまりは同時に未来をも捨ててしまった Duquette のような絶望的なフランス人達の中で『愚かにも』(“so stupidly”) 希望を持ち続けたいではいられなかった Mouse の純情が Duquette にルールを破らせたと言える。だからと言って彼は今後これまでの仕事を止めるわけでもなければ、女を誘わなくなるわけでもない。このカフェを立ち去る直前に男に声を掛け、最後にはマダムともベッドを共にしたいという気を起こしているように、暗澹たる未来が暗示されていることは確かだ。ただ、彼はその男を『汚れた奴』(“dirty old gallant”) (p. 299) と呼び、マダムの膚を想像して、『吐き気を催して』(“disgusting”) いる。それは取りも直さず彼自身へ下した自らの評価と考えられるかもしれない。汚らしいものを汚らしいと感じ、それと交わろうとする自分をも嫌悪する心がまだ多少なりとも彼に残っているとすれば、そのような絶望的状况の中にも微かな希望を見出すことができると言えるのではないだろうか。

語り手 Duquette のモデルは作者がかってその恋に走ったフランス人作

家 F. Carco とも夫 Murry だとも言われている<sup>(5)</sup>。しかし、作者自身が最後には「一体どこから取って来たのかわからない」(‘...couldn’t think where the devil I had got the bloody thing from’)と言っている通り<sup>(6)</sup>、それは彼女の心の最も奥深い所から掘り出されたものであろう。作家になるために豊かな経験を積むことだけを願って好きでもない男性と結婚式を挙げたり、エピファニー的瞬間に陶醉し、或いは役割演技に興じてみたり、それらは Mansfield の作家としての特色のいくつかであり、それが全て Duquette の表情として描かれているにすぎない。また、同性愛的傾向があったことも明らかな類似点である。そのように考えれば C. Hanson and A. Gurr の言うようにこの小説を彼女の自己戯画化<sup>(7)</sup>と捉える方法が最も相応しいかもしれない。自分の心の奥底にまで光を当ててこそ「地下室の手記」の語り手を思わせると言わせるほどの生々しい声を Duquette から引き出すことができたのであろう。「作家として少し大人になったような気がします」(‘I am in a way grown up as a writer.’)<sup>(9)</sup>という彼女の少し恥しそうな言葉の裏には、自己を突き放し赤裸々に描くことに成功したことへの大きな自信が窺われる。しかし、彼女がそれほどまで自分を墮落した人間とみなし、心身の腐敗を暴いて見せたとすれば、それはあまりにも過酷な孤独のメスの仕業と言わねばならない。絶望的に暗示された Duquette の未来にも一条の希望の光を投じざるを得なかったことが、彼女自身の『墮落からの叫び声』として聞こえて来るようだ。

## (注)

テキストは *The Stories of Katherine Mansfield*, ed. Antony Alpers (Oxford University Press, 1984) を使用。本文引用は全てこの版からであり、頁数は引用に続けて括弧に入れて示す。

(1) K. M. to J. M. M., 3 February 1918.

(2) K. M. to J. M. M., letter of 10 and 11 February 1918.

(3) Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (New York, The Viking

Press 1980), p. 273~p. 274.

- (4) 小田 忠「キャサリン・マンスフィールド 想像力の世界」(あぼろん社, 1979), p. 122.
- (5) Antony Alpers, p. 272~p. 273.
- (6) K. M. to J. M. M., 4 February 1918.
- (7) C. Hanson & A. Gurr, *Katherine Mansfield* (Macmillan, 1981), p. 66.
- (8) Antony Alpers, p. 270. C. Hanson & A. Gurr, p. 65. C. A. Hankin, *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories* (Macmillan, 1983), p. 162.
- (9) K. M. to J. M. M., letter of 10 and 11 February 1918.